

# 会計記録の重要性に関する一考察

新野正品\*

Study on the importance of accounting records

MASAAKI SHINNO

## 要旨

本研究は、会計記録の重要性について会計の定義との関係から検討を加えたものである。具体的には、会計の定義の中に「記録」という用語が存するか否かで、会計の役割が異なった様相を呈することに着目し、会計記録の社会的意義を探った。その結果、会計における「記録」の重要性は、企業がその時代に経済活動を行ったという事実を会計の領域の中で連綿と残し続ける（記録し続ける）点にあり、そこに社会的意義がある旨を主張した。

## キーワード

会計の定義、認識、測定、記録、伝達、事業の言語

## 1. はじめに

企業会計の役割は、主として、3つ存するといわれる。第1は企業の財産管理、第2は利害関係者との利害調整、第3は利害関係者の経済的意思決定への役立ちである。企業会計は、とりわけ営利企業の場合、利益追求の結果である損益の算定すなわち損益計算が特徴的なものとなり、算定され、報告された企業の実績（ここで実績とは、財務諸表によって示された企業の実態のことを指す）は、利害関係者の投下資本の回収に係る行動に影響を与え、企業もまた利害関係者の行動如何によっては、経営活動に影響を与える。3つの役割に共通する要素が、会計記録<sup>1)</sup>（以下、「記録」と記す）である。その「記録」の内容が正しければ、究極的には、企業に、少なからず良い影響をもたらすであろう。

ここでの稿者の関心事は、会計の定義と「記録」との関係である。結論から言えば、「記録」の重要性は、企業がその時代に経済活動を行ったという事実を会計の領域の中で連綿と残し続ける（記録し続ける）点にあるのではないかと考える。それは会計観（収益費用観、資産負債観）がどちらであっても変わらない。以下、なぜ稿者がこのような考えに

---

\* 広島文化学園大学大学院 社会情報研究科

Graduate School of Social Information Science, Hiroshima Bunka Gakuen University

至ったのかを解いていく。

## 2. 会計とは何か ― 2つの定義に見られるそれぞれの特徴 ―

会計とは何かという場合、よく引き合いに出される定義がある。それは、近代会計と現代会計の分岐点ともされている、アメリカ会計学会が公表した会計の定義である。

・アメリカ会計学会 (American Accounting Association : AAA)

「本委員会は、会計を、情報の利用者が事情に精通して判断や意思決定を行うことができるように、経済的な情報を識別し、測定し、伝達するプロセスである、と定義する。」

(出典 : American Accounting Association : *A Statement of Basic Accounting Theory : ASOBAT*, 1966. 飯野利夫訳『アメリカ会計学会 基礎的会計理論』国元書房, 1969年, p.2.)

この定義をひとまずここでは、

会計 = (特定の経済主体の経済活動を)「認識」「測定」「伝達」すること

という等式で示しておこう。アメリカ会計学会が示した定義は、現代会計を説明する上では、システマティックで理解が容易である。

これに対して、次のような定義もある。

・アメリカ公認会計士協会 (American Institute of Certified Public Accountants : AICPA) の述語委員会

「会計とは、少なくとも部分的には、財務的性格をもつ取引および事象を、意味のある方法で貨幣額によって、記録、分類、集計し、かつその結果を解釈する技術である。」

(出典 : American Institute of Certified Public Accountants : *Accounting Terminology Bulletins, Number 1 Review and Resume*, N.Y.: The Institute, p.9, 1953. 訳文の引用は、飯野利夫『財務会計論〔第三版〕』同文館出版, 平成9年, p.1-4.)

この定義は、先に見た 1966 年の定義が現れるまで、アメリカで「一般に権威あるものと認められていた」<sup>2)</sup> 定義であったという。

この定義をひとまずここでは、

会計 = (特定の経済主体の経済活動を)「認識」「測定」「記録」「伝達」すること

という等式で示しておこう。

さて、この2つの定義の違いについて、例えば飯野利夫教授は『財務会計論〔第三版〕』の中で、1941年の定義は、「この定義の特徴は会計を会計を行う者(広い意味での accountants)の行う業務(accountancy)としていることである」と述べ、1966年の定義は、「会計情報が情報の受け手の意思決定に役立つことを強調した会計情報の利用者に重点

をおいたもの」であると、それぞれの特徴を挙げ、1966年の定義は「会計情報を利用する不特定多数の者が予定されている」のに対して、1941年の定義は「会計等業務にたずさわる職業者集団が予定されている。」として「このような定義づけの変化のなかに、会計の社会的役割の変化をよみとることが出来る」と述べている。<sup>3)</sup>

また久野光朗教授は『アメリカ会計史序説－簿記から会計への進化－』の中で、1941年の定義を「会計人志向の定義」とし、1966年の定義を「利用者指向の定義」と呼んだ。<sup>4)</sup>

ちなみに興味深い考察として、神森智教授が『企業会計通論〔改定版〕』の第1章の文中で、「会計の領域を最も広く解する場合は、それを、家計からはじまって、個人企業、組合企業、会社、慈善事業その他の団体、さらには地方公共団体・政府の会計にいたるまでを含めて考えようとする。R.J.Chambers やアメリカ会計学会 (American Accounting Association : 略称 AAA) の「基礎的会計理論」(A Statement of Basic Accounting Theory , 1966 , ASOBAT) にみられる会計観である」<sup>5)</sup>と述べておられる。

これほどに現代の企業会計は、利用者指向が強い、あまねくどのような経済主体にも通用する会計観に立脚したものとなっている。

では会計から「記録」の重要性は消えたのだろうか。

### 3. 我が国の、近年の代表的な基本書に見られる会計の定義

先ほど挙げた2つの異なる等式を併記してみよう。

A : 会計 = (特定の経済主体の経済活動を)「認識」「測定」「伝達」すること  
 B : 会計 = (特定の経済主体の経済活動を)「認識」「測定」「記録」「伝達」すること

A は 1966 年から現代までの会計の定義に関する等式であり、B は 1941 年から 1966 年までの会計の定義に関する等式と解釈すると、前者はドライな現代の会計であり<sup>6)</sup>、情報の「伝達」に重点を置いた会計である。これに対して後者はウェットな伝統的な会計であり、とりわけ「記録」に重点を置いた会計ということができる。

この違いはやはり、会計を取り巻く環境の変化によるところが大きい。すなわち経済環境や経営環境の変化、科学技術の発達、経済活動を行う人の価値観の変化などが背景にある。歴史的には、企業の弁済能力、証拠能力を測るための会計（静態論的思考）、企業の利益獲得能力を測るための会計（大陸的な動態論的思考）、企業の配当可能利益を測るための会計（英米的な動態論的思考）という時代を経て、今世紀に入ると、企業価値を測るための会計（ネオ静態論的思考）という時代となった。さらに昨今では有用な会計情報の提供に関して、企業と利害関係者の建設的な対話が可能な会計を模索する（財務報告のあり方を変革させる）動きさえある。<sup>7)</sup>

かように、会計の社会的役割は変容した。その過程において、これまでになかった取引や事象も生まれた。リース取引しかり、金融商品に係る取引もしかりである。最近取りざ

たされている仮想通貨取引は IT 社会を背景にしたこれまでに無かった取引であり、企業の経済活動に影響を与える取引となりつつある。仮想通貨を利用した取引は電子商取引であるが、仮想通貨取引の会計が基準化されれば、企業は当該取引を「認識」「測定」「伝達」することになる。

しかし、本質的に大切なことは、目的や理由が何であれ、「記録」の必要があるから、会計を行うのである。ただ、その時代その時代に、人が会計をどのような見地と必要性から関わってきたかによって、会計という行為も会計に対する態度も変わってきたのである。

このことを踏まえて、以下、我が国の財務会計の研究者、とくに基本書として名高い、桜井久勝教授 <sup>8)</sup>、<sup>9)</sup>、伊藤邦雄教授 <sup>10)</sup>、 広瀬義州教授 <sup>11)</sup>、がそれぞれの文献でどのような会計の定義を示しているのかを確認し <sup>12)</sup>、<sup>13)</sup>、「記録」の重要性を考える参考にしてみよう。ちなみに稿者の関心事は、各研究者の会計の定義（または説明）の中で、「記録」という用語をどのように位置づけているのかということである。<sup>14)</sup> この点に注目して、三人が示した定義を並べた。なお、太字に太いアンダーラインを付しているものが、会計記録（「記録」）を言い表している（もしくはそのように考えることができる）箇所である（文中の網掛けや各種の下線は、稿者が付けた）。

・ 桜井久勝

「会計（Accounting）は、ある特定の経済主体の経済活動を、貨幣額などを用いて計数的に測定し、その結果を報告書にまとめて利害関係者に伝達するためのシステムである。」

（出典：桜井久勝『財務会計講義＜第 19 版＞』中央経済社、2018 年、p1.）

「会計とは特定の組織による経済活動を貨幣額で記録して計算し、その結果を報告するシステムである。」（出典：桜井久勝・須田一幸『財務会計・入門＜第 12 版＞』有斐閣、2018 年、p3.）

・ 伊藤邦雄

「会計を要約すれば、ある経済主体（単一の企業であることも、企業集団であることもある）の活動や事象を主として貨幣額によって測定・伝達するプロセスである、と表現することができる。言い換えれば、ある経済主体にかかわる大量で複雑な活動や事象を一定のルールに従ってある数値に写し換え、それを整理・統合して何組かの財務諸表を作成し、それを報告する一連の手続きが、会計である。」

（出典：伊藤邦雄『新・現代会計入門＜第 3 版＞』日本経済新聞出版社、2018 年、p.42.）

・広瀬義州

「ここでは、「会計」とは経済主体が営む経済活動およびこれに関連する経済事象を測定・報告する行為をいうと定義しておくことにしよう。

要するに、会計は現実の世界である経済活動および経済事象を描写することであり、具体的な描写にあたっては、経済活動および経済事象を会計数値にできるだけ忠実に変換して報告する行為である。」

(出典：広瀬義州『財務会計（第13版）』，中央経済社，2018年，p2.)

これらの定義からそれぞれ次のような特徴があることが分かる。1つには広い意味で「測定」の過程の中で「認識」という行為があり、それは、「経済主体」の「経済活動や事象」を「貨幣的に」という文脈の中に含まれて説明されているということである。今1つには、「会計」は「システム」（桜井教授）として一体であり、財務諸表に集積されていく「プロセス」「一連の手続き」（伊藤教授）であり、「行為」（広瀬教授）である、ということである。では、「記録」は会計の定義の中で、どう位置づけられているのだろうか。

#### 4. 会計の定義と「記録」との関係

あらためて各研究者の定義を見てみよう。次のように整理ができる。

・桜井教授の文献では、須田教授との共著の中で、「記録し」という表現を使って説明をしてはいるが、単著のほうでは「記録」という用語を直接には使っていない。

・伊藤教授の文献では、「記録」という用語を使わずに、「一定のルールに従ってある数値に写し換え、それを整理・統合して」という表現を用いて会計を定義づけている。

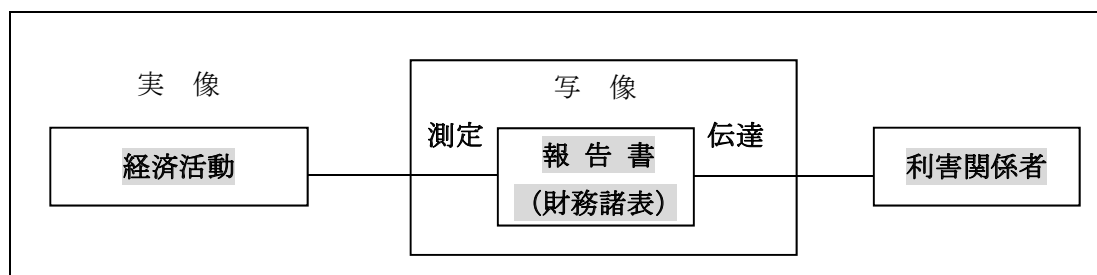
・広瀬教授の文献では、「記録」という用語を使わずに、経済活動を「描写」する、経済活動を「会計数値にできるだけ忠実に変換」という表現を用いて定義づけている。

三者とも、会計を定義（または説明）する際に、必ずしも「記録」という用語を直接的に使っているわけではない。しかし、「記録」について想起させる表現が（上記で示したように）散見される。そしてそれは「記録」という用語の背後にある会計の本質を言い当てているように思われる。

なお私見ではあるが、広瀬教授の表現を借用しながら述べるとすると、「記録」とは、「伝達」（報告）のために、特定の経済主体の経済活動を、会計的手法により継続して「写し換え」（「描写」／「できるかぎり忠実に変換」）していく行為である。

ちなみに、三者に共通している会計の概念図は、桜井教授が示す下記の概念図 15)と基本的には同様であろう（それがシステムなのか、手続きなのか、行為であるのかは別として）。

図表：会計の概念図



(出典：桜井久勝『財務会計講義＜第 19 版＞』中央経済社，2018 年,p1.より。一部加工。)

会計の定義や説明を確認したうえでこの概念図を見ると、会計は、企業にとって、少なくともシステム（system）を機能させる手段であり、滞りなく手続き（procedure）を進めていくための必要不可欠な一連の作業であり、そして（これが重要なのであるが）人が行うビジネス（営み）の中での重要な行為(action)ということになる。企業が利害関係者へ提供する会計情報は、これ（会計）が無いと生まれない。ではあらためて下記の等式をみてみよう。

- A：会計＝（特定の経済主体の経済活動を）「認識」「測定」「伝達」すること  
 B：会計＝（特定の経済主体の経済活動を）「認識」「測定」「記録」「伝達」すること

興味を引く点は、それぞれの鍵付き（「」）の用語に手段、作業、行為という用語をプラスして表記した際に、三人の研究者が示した定義は、次のように解釈できるということである。

- ・「 」＋手段：認識手段、測定手段、伝達手段 ：戦略的見地。
- ・「 」＋作業：認識手続き、測定手続き、伝達手続き ：業務的見地。
- ・「 」＋行為：認識行為、測定行為、伝達行為 ：目的的・実践的見地。

この理解が正しいとすれば、次に、B の等式に、それぞれの用語をプラスしてみると、どうだろうか。

- ・「 」＋手段：認識手段、測定手段、記録手段、伝達手段 ：戦略的見地。
- ・「 」＋作業：認識手続き、測定手続き、記録手続き、伝達手続き ：業務的見地。
- ・「 」＋行為：認識行為、測定行為、記録行為、伝達行為 ：根源的・実践的見地。

さらに、会計という用語に、それぞれの用語をプラスして表記してみよう。

- ・会計＋手段＝会計手段⇔会計方法 … この用語に「論」を付すと、会計方法論
- ・会計＋作業＝会計作業⇔会計手続き … この用語に「論」を付すと、会計手続論
- ・会計＋行為＝会計行為 … この用語に「論」を付すと、会計行為論



A と B の両方に共通していることは、会計を「行為」と捉えた時に、会計の社会的意義が示されるのではないかと、ということである。<sup>16)</sup> また「記録」を定義の中に入れた時（または「記録」を表現するに等しい内容が定義に盛り込まれている時）、会計の根源的な（本質的な）役割が立ち上がってくるのではないかと、ということである。さらに、A と B を比較して、後者の B になると、会計は人が行う行為の 1 つであり、それは目的が何であろうとビジネスに必要な不可欠な行為なものであることを我々に示してくる。<sup>17)</sup>

このようにみると会計は、人の営み（企業が行う経済活動）に対して何かを問い続ける行為であり、手段、手続きである。問題は誰が何のために何を問いかけて「記録」するのかということであろう。記録と伝達、その方法と内容は時代によって変容する。<sup>18)</sup>

## 5. おわりに ～会計行為と「記録」～

「記録」の重要性、それは、企業がその時代に経済活動を行ったという事実を会計の領域の中で連綿と残し続ける（記録し続ける）点にあるのではないかと、稿者は考える。このことは会計観（収益費用観、資産負債観）がどちらであっても変わらない。

先ほど稿者は、「会計の定義と「記録」との関係は、かように、人の営み（企業が行う経済活動）に対して何かを問い続ける行為であり、問題は誰が何のために何を問いかけているのか、ということであろう。それは時代によって変容する。」と述べた。

これに関して、飯野利夫教授の『財務会計論〔第三版〕』（1991）「第 1 章 序論」「付記 1. 財務会計の歴史」<sup>19)</sup> の記述内容が参考となるので、一部引用する。そこでは世界史の観点から、中世イタリアの冒険商人の時代から 1980 年代までの（主に財務会計の領域で起きた）主要な出来事を案内されており、最後に次のように述べておられる。<sup>20)</sup>

「以上のべたような財務諸表およびその監査の重要性の深化と、産業革命以後の工的企業の発達に伴う原価計算技術の進歩とは、今世紀の初め、会計を社会科学として生みだす原動力となった。このように、会計上の実践と経験とを蒸留した産物としての会計ないし会計学は、たえず、変化する社会的・経済的環境から見直しが要請され、それに答えながらたえず変化し発展を続けている。

ジョージ・オー・メイの次の言葉はそのような性格をいいあらわしたものとして、味うべきであろう。

「会計の諸規則は法律の諸規則にも増して、論理よりはむしろ経験の産物である。」

稿者はこの内容を次のように解釈する。すなわち、人の営みによって成立してきた会計は、合理的経済人が形成してきたものではなく、ましてや机上の論理で生まれたものではない。債権債務の管理を目的とした「記録」、裁判での証拠能力や納税を目的としての「記録」、委託受託の関係からの「伝達」（報告）、利害調整機能としての会計（およびその裏付けとなる「記録」）、投資者への有用な会計情報の提供、といった具合に、必要に応じて変

容してきた。したがって、我々は、現実、実践をつぶさに観察し、その時代に合った会計実践を志向せよ、と。

会計は、「記録」によって、歴史の語り部の役割を果たす。会計は「事業の言語」<sup>21)</sup>であるから、それが本質的な使命なのかもしれない。その言語は「記録」によって纏められた財務諸表によって伝えられる。財務諸表は、そのような意味合いをも包含した計算書類である。それは歴史がおのずと語り出すように、「記録」の結果もまた自らが語り出すかもしれない。その時代に存在した経済人がこの世から去っても、会計記録の存在が、彼らの営みを（何かをきっかけに）語るのである。そう考えると、「記録」は「認識」「測定」「伝達」にまで及ぶ共通の構成要素といえることができる。そしてここに、「記録」の重要性があると考えられるものである。

（付記）本研究論文は、2018年5月12日（土）に静岡産学交流センターで開催された日本企業経営学会第56回研究部会（静岡大会）での発表原稿に、加筆修正を加えたものである。

#### 《注》

- 1) 会計記録の研究については、工藤栄一郎教授の下記2つの著書が代表的なものとして挙げられよう。『会計記録の基礎』中央経済社、2011年（以下ここでは工藤（2011）と記す）と『会計記録の研究』中央経済社、2015年（以下ここでは工藤（2015）と記す。）がそれである。

工藤（2011）は「人は何を、なぜ、そしてどのように会計記録をおこなってきたのか」という問題意識を持ってまとめた」（まえがき p.1）と述べ、日常的な記録に関する考察から会計学領域の記録について、教育との考察も含め、「会計記録の生成と展開に関する「物語」」（まえがき p.1）を歴史的なアプローチによって深く研究し、解き明かしておられる。

また工藤（2015）では、現代の企業会計が置かれている環境を念頭に、「会計記録の営みは、どうなる」（序文 p.i）のか、そもそも会計とは何か、会計記録とは何かについて、「その意義と重要性についての再認識の作業を歴史的な観点から」（序文 p.iii）、会計記録の生成と発展、複式簿記の歴史的発展を柱に考察されている（ちなみに今回稿者は、この工藤教授の研究内容や見解を取り上げていないものの、その問題意識や手法、考え方には触発されている）。

- 2) 飯野利夫『財務会計論〔第三版〕』同文館出版、平成9年、p.1-4.  
3) 飯野利夫、同上書、平成9年、p.1-4.  
4) 久野光朗『アメリカ会計史序説－簿記から会計への進化－』同文館出版、平成21年、p.6.  
5) 神森智、宮川嘉春、倉田三郎編著、『企業会計通論〔改定版〕』同文館出版、昭和63年、p.5.  
6) 神森智教授はこのAAAが示した会計観に関して、「このような会計職能観は、それが



頭に画く会計システムを設計するために、既存の会計の枠を大きくのりこえて、ドラスティックな改良・改善の可能性を考えることとなる。アメリカ会計学会のステイトメント (ASOBAT)」にみられる原価・時価併記の二欄式財務諸表は、その典型である。プラグマチズムの会計理論といわれるゆえんである。それは、慣習の中から制度的なものとして成立し、現に行われている会計の下における会計職能にたいする理解とは全く次元を異にするものである。」と述べておられる。(神森智, 宮川嘉春, 倉田三郎編著, 同上書, p.9.)

- 7) 財務報告の今後の在り方を深く研究している代表的な文献としては、広瀬義州編著『財務報告の変革』中央経済社 (2011 年) や広瀬義州・藤井秀樹責任編集『体系現代会計学 第 6 巻 財務報告のフロンティア』中央経済社 (2012 年) などが挙げられる。
- 8) 桜井久勝『財務会計講義<第 19 版>』中央経済社, 2018 年, p1.
- 9) 桜井久勝・須田一幸『財務会計・入門<第 12 版>』有斐閣, 2018 年, p3.
- 10) 伊藤邦雄『新・現代会計入門<第 3 版>』日本経済新聞出版社, 2018 年, p.42.
- 11) 広瀬義州『財務会計 (第 13 版)』中央経済社, 2018 年, p2.
- 12) 友岡賛教授は、著書『会計学の考え方』「第 1 章「会计学」の来し方」の中で、吉田良三、太田哲三、黒澤清、植野郁太、飯野利夫、伊藤邦雄、桜井久勝、広瀬義州の 8 名の代表的なテキストを時代順に取り上げ、(中でも目次と序文に注目して) 会计学とは何かということについて考察を加えておられる。(友岡賛『会計学の考え方』泉文堂, 2018 年, pp.16-43)。
- 13) 友岡教授はまた、著書『会計学の考え方』「第 5 章事業の言語の種々の方言」「[外部報告会計=財務会計] という捉え方」という節で、広瀬義州教授、伊藤邦雄教授、桜井久勝教授のスタンダードテキストおよび飯野利夫教授のそれも取り上げ (友岡賛, 同上書, pp.146-148)、「財務会計の定義をサーベイしておこう。」として、各教授の定義を紹介し、[外部報告会計=財務会計] ととらえている」こと、「したがって、規制会計も財務会計の範疇に入れられてしまうこととなる」ことを紹介している (友岡賛, 同上書, pp148.)。
- 14) 稿者の今回の研究も、友岡教授同様、伊藤邦雄、桜井久勝、広瀬義州 3 名の教授のテキストを取り上げたが、稿者の場合は、会計の「記録」に焦点を当てて研究を行った。
- 15) 桜井久勝, 前掲書, 2018 年, p1.より。一部加工。
- 16) 井上良二教授は財務会計とは何かを論じる中で「財務会計を人間 (accountants—経営者を含めて会計的な変換と伝達に関わる意思決定に参加する人々) の社会的行動の一つである (…中略…: 稿者)。すなわち、財務会計というのは行動にほかならず、その行動は、記録・計算・集計行動であるとか、認識・測定・報告行動であるとかいわれる。この人間の社会的行動である財務会計という行動 (…中略…: 稿者) は会計人が各種の制約 (会計人の行動目的、情報作成者および情報利用者の利害状況、情報利用者による情報作成者に対する役割期待、法や慣習による行動の規制等) を受けながら認識・測定対象である企業活動および企業をめぐる経済的環境を会計上の諸概念 (用語) を用いて

認識し、貨幣数値を用いて測定し、その結果を報告するという人間の社会的行動の一つである。」と述べている。(井上良二『新版 財務会計論』税務経理協会, 平成 20 年, p.14.)

- 17) 会計を「会計行為」と呼ぶか「会計行動」と呼ぶかはまた確認の必要があるが、「会計行動」と表現している文献としては例えば、青柳文司教授による編著『会計理論の基礎知識 会計学基礎講座／1』「第 8 章 学際論」「3 会計学と行動理論」の中に見ることができる。また河崎照行教授は『最新 中小企業会計論』「第 26 章 中小企業会計の活用事例」の中で、(活用事例には)「会計をめぐる行為として、作成・開示行為と利用行為の 2 つが示されている」(p.265)と記述し、「会計の作成・開示行為は、企業の目的である利益獲得の程度を貨幣金額によって描写(写像または測定)し、情報として提供(開示)する行為である。」(p.265)と述べている。
- 18) 神森智教授は『企業会計通論〔改訂版〕』「第 2 章 複式簿記の計算構造」の中で、「企業会計の記録と計算は、慣習として、複式簿記によってきた。」とし、複式簿記の歴史、複式簿記はその「見事なメカニズム」によって採用され続けたことを述べ、次のように記述している。すなわち、「複式簿記は、計算目的に対して中性的な容器でもあるということもできる。それは、財産計算を目的とする会計をもうけ入れることが出来るし、損益計算を目的とする会計をのせることもできる。さらに、企業会計以外の会計とも結びつくことができるからである。複式簿記は、種々な計算目的と結びつきうる、それ自身中性的な、したがって形式的な計算機構であるといえよう。もっとも、複式簿記の本質的なものは、財産管理にあるとする捉え方もある。」(神森智, 宮川嘉春, 倉田三郎編著, 同上書, p.18.)
- 神森教授はさらに、「情報諸科学の発達、伝統的な複式簿記の提供する回顧的・金額的情報のみではあきたらず、これに加えて、未来情報や物流情報を提供する会計システムの発達をもうながすこととなる。コンピュータ会計ないし EDP 会計には、伝統的な複式簿記にたいする、こうした質的变化が含まれてくることとなる。」(神森智, 宮川嘉春, 倉田三郎編著, 同上書, p.19.)と述べ、(複式簿記を含む)会計が、時代や人間、諸々の環境を無視できない動的なものであることを示唆している。
- 19) 飯野利夫, 前掲書, p.1-20 - 1-22.
- 20) 飯野利夫, 同上書, p.1-22.
- 21) 伊藤邦雄, 前掲書, p.42.

#### 《参考文献》

##### (五十音順)

1. 青柳文司編著『会計理論の基礎知識 会計学基礎講座／1』中央経済社, 平成 2 年.
2. 飯野利夫『財務会計論〔第三版〕』同文館出版, 平成 9 年.
3. 伊藤邦雄『新・現代会計入門<第 3 版>』日本経済新聞出版社, 2018 年.
4. 井上良二『新版 財務会計論』税務経理協会, 平成 20 年.

5. 神森智, 宮川嘉春, 倉田三郎編著, 『企業会計通論〔改定版〕』同文館出版, 昭和 63 年.
6. 河崎照行『最新 中小企業会計論』中央経済社, 2016 年.
7. 工藤栄一郎『会計記録の基礎』中央経済社, 2011 年.
8. 工藤栄一郎『会計記録の研究』中央経済社, 2015 年.
9. 久野光朗『アメリカ会計史序説―簿記から会計への進化―』同文館出版, 平成 21 年.
10. 桜井久勝『財務会計講義<第 19 版>』中央経済社, 2018 年.
11. 桜井久勝・須田一幸『財務会計・入門<第 12 版>』有斐閣, 2018 年.
12. 友岡賛『会計学の考え方』泉文堂, 2018 年.
13. 広瀬義州『財務会計 (第 13 版)』中央経済社, 2018 年.
14. 広瀬義州編著『財務報告の変革』中央経済社, 2011 年.
15. 広瀬義州・藤井秀樹責任編集『体系現代会計学第 6 巻 財務報告のフロンティア』中央経済社, 2012 年.